

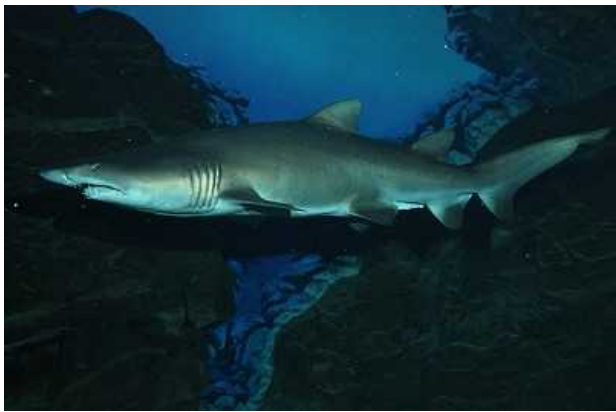



海洋生物レッドリスト掲載種において 注目される種のカテゴリー（ランク）とその評価の理由

魚類

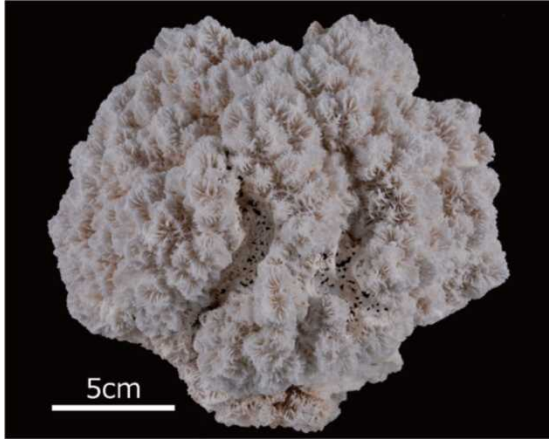
和名	タマカイ	絶滅危惧 A 類 (CR)	
学名	<i>Epinephelus lanceolatus</i>		
この種について			<p>上: 成魚(産地不明) 右下: 幼魚(インドネシア産) 写真提供: 神奈川県立生命の星・地球博物館(瀬能宏撮影)</p>
<p>ハタ科の中では最大級の種で、体長が 2m を超える巨大海水魚。ペルシア湾を除くインド洋から太平洋にかけての海域に広く分布し、水深 100m 以浅の岩礁やサンゴ礁に単独で生息する。</p> <p>日本では沖縄島以南の琉球列島、和歌山県、伊豆・小笠原諸島での確認記録がある。</p> <p>美味なため食用として漁獲対象となり、台湾等では養殖も行われている。また、観賞魚としても漁獲される。IUCN レッドリストでは VU として掲載されている。</p>			
評価の理由			
<p>本種は成熟サイズが約 130cm とハタ科の中でも特に巨大であり、浅い岩礁やサンゴ礁に散在的かつ単独で生息することから、もともと極めて稀な種である。特に近年では、成熟個体の明確な漁獲・確認事例がほとんどない。すでに国内における個体数は極めて少ないと考えられ、さらなる減少が懸念されることから、絶滅の危険性が極めて高いと判断し、絶滅危惧 IA 類 (CR) に選定した。</p>			


和名	ゼブラアナゴ	絶滅危惧 A 類 (CR)	
学名	<i>Heteroconger polyzona</i>		
この種について			<p>写真提供: 矢野維幾(ダイブサービス YANO)</p>
<p>本種を含む日本産アナゴ科チンアナゴ亜科魚類は 5 種知られており、いずれもガーデンイール(garden eels)と総称されている。愛媛県愛南、沖縄島、西表島、フィリピン諸島、インドネシア、ニューギニア島、バヌアツ諸島から記録があるが、個体数は少ない。水深 1 ~ 2m の砂底に生息する。全長 30cm 程度。</p>			
評価の理由			
<p>現在もまとまった個体数の生息が確認されるのは、西表島の 1 地点に限られる。各地で魚類相調査が行われている他、ダイバーによる水中撮影が盛んだが、その他の地域におけるまとまった個体数の記録はない。愛媛県や沖縄島の記録は海流による偶発的な分散と考えられる。</p> <p>既に知られている生息地は底質汚染が進行しており、本種への影響が懸念される。個体数が減少する可能性も十分に考えられることから、絶滅の危険性が極めて高いと判断し、絶滅危惧 IA 類 (CR) に選定した。</p>			


和名	シロワニ	絶滅危惧 B 類 (EN)	
学名	<i>Carcharias taurus</i>		
この種について			写真提供: マリンワールド海の中道
<p>大型のサメで、最大で 3m 以上になる。伊豆諸島、小笠原諸島、黄海、中国東シナ海沿岸、台湾などで報告がある。</p> <p>国内では小笠原諸島の個体群のみが再生産を維持していると思われる。IUCN の評価では VU として掲載されている。</p>			
評価の理由			
<p>少なくとも近年においては、日本では小笠原諸島周辺のごく限られた島しょ域でのみ報告されている。琉球列島からは未報告である。1960 年代には東シナ海でも採集されていたが、それ以降は隣接する台湾沿岸での数例を除くと確実な出現事例は報告されておらず、現在ではほとんど生息していない可能性がある。</p> <p>繁殖周期は 2 年である。卵食・共食い型の胎生で、子宮内の幼魚（胎仔）は、母ザメが供給する栄養卵だけでなく、他の胎仔も食べて栄養源とする。</p> <p>分布が限定的であることに加え、共食い型で産仔数が少なく（通常 2 個体）、さらなる個体数の減少が懸念されることから、絶滅の危険性が高いと判断し、絶滅危惧 IB 類(EN)に選定した。</p>			

和名	オキナワキチヌ	絶滅危惧 類 (VU)	
学名	<i>Acanthopagrus chinshira</i>		
この種について			写真提供: 立原一憲 (琉球大学)
<p>キチヌに似ているが分布が異なる。本種は国内では沖縄島の内湾にのみ見られ、国外では台湾と香港に分布する東アジア固有種と考えられる。体長 40cm 程度。</p>			
評価の理由			
<p>漁獲される場所が限定されており、かつ漁獲量が減少傾向にある。産卵期の冬に比較的岸近くに集まるため、産卵群に集中的に漁獲圧がかかる。1 年の水揚げのほとんどが産卵期前後に集中している。さらに年々、大型魚の水揚げが減少している。</p> <p>分布が限られており、さらなる個体数の減少も懸念されることから、絶滅の危険が増大していると判断し、絶滅危惧 II 類(VU)に選定した。</p>			

サンゴ類

和名	オガサワラサンゴ	絶滅 (EX)	
学名	<i>Boninastrea boninensis</i>		
この種について			東北大学所蔵標本より撮影 写真提供: 立川浩之(千葉県立中央博物館)
<p>昭和 10 (1935) 年に小笠原諸島父島より採集された 1 群体に基づき新種記載された種であり、東北大学にタイプ標本 (種の基準になる標本) が現存するのみである。国外でもインドネシアのスンバウ島で本種とされる標本が報告されているのみであり、世界的にも稀な種であると考えられている。なお、一時、日本の有藻性イシサンゴ類分布域の各地に生息するノウサンゴ属の一種が本種と誤認されていたが、その後全く別の種であることがわかっている。</p>			
評価の理由			
<p>本種は、父島二見港東岸の潮間帯にわずかに生息していたが、小笠原諸島を含む日本全域からその後全く再発見されておらず、さまざまな研究者の調査や環境省が実施している自然環境保全基礎調査、モニタリングサイト 1000 のサンゴ礁調査等でも今まで確認されたことはない。また、一般のダイビング等でも報告された事例はない。</p> <p>小笠原諸島には約 200 種のサンゴが生息しているといわれているが、海洋島であり周辺に卓越した海流が存在しないこともあって、その種組成は沖縄などの南西諸島とは異なり、高緯度サンゴ群集域の影響も受けた独特のものである。また、地形が急峻なため、サンゴ礁地形が形成される場所は限られている。オガサワラサンゴは、こうした特徴のある小笠原諸島周辺海域の狭い範囲にわずかに生息していたが小笠原諸島を含む日本全域からその後全く再発見されていないことから、飼育・栽培下を含め我が国では絶滅したと判断し、絶滅 (EX) とした。</p>			

和名	ハナサンゴモドキ	絶滅危惧 B 類 (EN)	
学名	<i>Euphyllia paraglabrescens</i>		
この種について			写真提供: 野村恵一 (串本海中公園センター水族館)
<p>長く突出した個体が花束状に集まった形の群体 (直径は約 15cm) を形成する。緑色、灰褐色、くすんだ黄色の球状の触手を日中良く伸ばす。波当たりの弱い内湾域を好み、水深 10m 以浅の礁斜面もしくは岩礁斜面上で見られる。種子島を模式産地とし、国内では種子島と屋久島、国外では唯一台湾から確認されており、東アジア海域の固有種と考えられる。</p>			
評価の理由			
<p>本種は国内では種子島と屋久島のための狭い範囲に分布する。また、本種は内湾域の水深 10m 以浅の海域に生息するが、このような海域は物理的環境変動が大きく、かつ陸域からの攪乱を受けやすく、さらに近年、港湾整備により攪乱を受けた可能性がある。屋久島の個体群は 1990 年代以降に高水温由来の白化現象に起因すると思われる大幅な減少が確認されており、種子島においても同様の傾向を持つことが予想される。さらに、本種はアクアリスト向けに採取・販売がされていることから、その影響も懸念される。以上の理由から、本種は絶滅の危険性が高いと判断し、絶滅危惧 IB 類(EN)に選定した。</p>			

和名	エダミドリイシ	絶滅危惧 類 (VU)	
学名	<i>Acropora pruinosa</i>		
この種について			写真提供: 横地洋之 (東海大学)
<p>かつてはヒメエダミドリイシとされていたが、近年のイシサンゴ類相の再整理を基に、和名をエダミドリイシとした。色彩は、緑色や褐色、明るい黄緑色などである。水深 10m 以浅の遮蔽的環境の砂礫底や岩盤上に純群落を形成することが多い。九州から房総半島までの広い範囲に不連続に分布し、サンゴ礁域には出現しない。</p>			
評価の理由			
<p>本種は九州から房総半島までの広い範囲に分布しており、長崎県海域では顕著な減少は観察されていないものの、その他の海域 (高知県、徳島県、和歌山県、三重県、静岡県) では巻貝やガンガゼの食害、南方系種との競争、台風、低水温、港湾整備工事などの要因による減少あるいは死滅が報告されている。各地域の個体群の生息地面積は小さく、遺伝的多様性も低い。広範囲に散在分布していることから、集団間の遺伝子交流も少ないと考えられる。このように、生息地が分断されていること、またそのほとんどで減少傾向が見られ、今後も継続的減少が予測されることなどから、絶滅の危険が増大していると判断し、絶滅危惧 II 類(VU)に選定した。</p>			

甲殻類

和名	オガサワラベニシオマネキ	絶滅危惧 A 類 (CR)
学名	<i>Paraleptuca boninensis</i>	



写真提供: 佐々木哲朗(小笠原自然文化研究所)

この種について

父島固有種のオガサワラベニシオマネキは、太平洋から東部インド洋に広く分布するベニシオマネキとされていたが、平成25(2013)年に新種記載された。小河川河口干潟の非常に限られた範囲にのみ生息している。甲幅(こうらの横の長さ)は16mm。

評価の理由

小笠原諸島父島固有の本種は、二見湾に注ぎ込む小河川の河口干潟の非常に狭い範囲でわずかに確認されているのみである。近年の調査より、本種の個体数が減少していることが報告されている。小笠原では護岸改修や生活排水などの影響を受けて生息場所の干潟環境も改変されているため、今後、厳重な注意を払いつつ生息地の保全をする必要がある。以上の状況より、絶滅の危険性が極めて高いと判断し、絶滅危惧 IA 類(CR)に選定した。

和名	ウチノミカニダマシ	絶滅危惧 B 類 (EN)
学名	<i>Polyonyx utinomii</i>	




写真提供: 渡部哲也(西宮市貝類館)

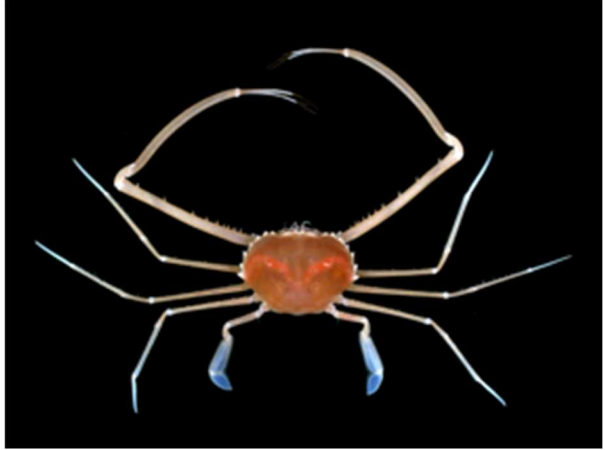
この種について


伊豆半島以南に生息するカニダマシ類である。ツバサゴカイの棲管内に共生し、1つの棲管内から雌雄のペアで見つかることがしばしばある。写真個体の甲長(こうらの縦の長さ)はメス 4.0mm(右)とオス 3.7mm(左)。

評価の理由

本種の宿主はツバサゴカイで、これまで他の宿主は知られていない。有明海における宿主に対する共生率は低く、かつ宿主の個体群密度も低いいため分布域は広いにもかかわらず観察される機会は少ない。宿主のツバサゴカイが全国的に減少傾向のため、生活史の一部を宿主に依存する本種は、宿主と同等に危機的な状況にある。以上の状況より、絶滅の危険性が高いと判断し、絶滅危惧 IB 類(EN)に選定した。


和名	ミナミアナジャコ	絶滅危惧 B 類 (EN)	
学名	<i>Upogebia carinicauda</i>		
この種について			写真提供: 遠見由美・伊谷行(高知大学)
<p>奄美以南に分布するアナジャコ類で、砂泥質干潟にY字状の巣穴を掘ってその穴に生息する。甲長(こうらの縦の長さ)は10mm。胸部に付着しているのはシマノハテマゴコロガイ。</p>			
評価の理由			
<p>インド太平洋に広く分布するが、国内では、分布域が奄美大島、加計呂麻島と沖縄島の干潟に限られている。いずれの干潟においても海岸開発等により環境の悪化が進み、生息地が失われ、本種の個体数が大きく減少している。以上の状況より、絶滅の危険性が高いと判断し、絶滅危惧IB類(EN)に選定した。なお、本種にはアナジャコノハラヤドリ(EN)とシマノハテマゴコロガイ(CR+EN)といった国外からは確認されていない種が共生している。</p>			

和名	クメジマドウクツガザミ	絶滅危惧 B 類 (EN)	
学名	<i>Atoportunus dolichopus</i>		
この種について			写真提供: 藤田喜久(沖縄県立芸術大学)
<p>久米島、沖縄島及び宮古諸島に生息する希少なタリガニ類で、サンゴ礁域の海底鍾乳洞に生息する。甲幅(こうらの横の長さ)は50mm。写真個体の甲幅は30.9mm。</p>			
評価の理由			
<p>本種は、サンゴ礁域の海底鍾乳洞という特殊な環境に依存して生息しており、分布も琉球列島の沖縄島、久米島、下地島(宮古諸島: 写真記録のみ)に限定される。近年、レジャーダイバーなどによる海底洞窟への潜水が盛んになり始めており、過度な入洞による環境悪化(水中ライトによる過剰な光や呼吸による環境攪乱)が懸念される。以上の状況より、絶滅の危険性が高いと判断し、絶滅危惧 IB 類(EN)に選定した。</p>			


和名	ムチャギカクレカニダマシ	絶滅危惧 類 (VU)	
学名	<i>Lissoporcellana flagellicola</i>		
この種について			<p>本種は、現在までに沖縄島の金武湾のみから知られる希少なカニダマシ類である。本種は、内湾の砂泥底質環境に生息するムチャギ類のみに共生する。写真個体の甲長(こうらの縦の長さ)はメス 7.6mm (右)とオス 6.8mm (左)。</p> <p>写真提供: 藤田喜久(沖縄県立芸術大学)</p>
評価の理由			
<p>本種の宿主は、沖縄でも少ない内湾性の環境のある金武湾の泥場に生息するムチャギ類である。宿主ムチャギ類が生息する海域では海岸開発等の影響が懸念され、また、沖縄島でも有名なダイビングスポットのため、過剰な接触や採集等による影響も考えられる。本種は金武湾以外で見つかっておらず、生息地が局所的であることを考慮すると、絶滅の危険が増大していると判断し、絶滅危惧 II 類(VU)に選定した。</p>			

軟体動物（頭足類）


和名	ベイカ	準絶滅危惧 (NT)		写真提供：田川勝
学名	<i>Lololus beka</i>			
この種について				
<p>ヤリイカ科に属する成熟しても 10cm 程度の小型のイカであり、内湾のごく浅い砂泥域などを主な生息地として利用していると考えられている。東南アジア、中国の大陸沿岸に広く分布するが、日本では瀬戸内海の岡山県付近と有明海、八代海にのみ分布しており、これらの地域では食用に利用される。</p> <p>なお、市場でヤリイカ科の小型個体の総称として「ベイカ」が使われている場合もあり、本種を含む複数種のイカを含んでいる可能性があるため注意が必要。</p>				
評価の理由				
<p>本種は、内湾環境への依存度が高く、国内における分布域が限られている。また、内湾のごく浅い砂泥域等を主な生息環境としており、このような環境の砂底や泥底の表面に産卵することから、近年各地で進んでいる干潟の埋め立てや、河川改修などによる底質のかく乱など、河口域の環境変化にさらされている。また、外部の個体群の加入により個体数が維持されている可能性は低く、種の存続への圧迫が強まっていると判断されることから、準絶滅危惧(NT)に選定した。</p>				


和名	ナギサアナダコ	準絶滅危惧 (NT)		写真提供：小野奈都美
学名	<i>Octopus incella</i>			
この種について				
<p>マダコ科に属する全長 15～20cm 程度の小型のタコで、潮の満ち引きの影響があるサンゴ礁域の磯や干潟に生息している。メスは砂浜の波打ち際に点在する石やサンゴ瓦礫にあいた穴に営巣し、産卵する。日本では沖縄本島北部の西岸および瀬底島でのみ生息が確認されている。これまでに海外での分布は確認されていない。</p>				
評価の理由				
<p>本種は、比較的最近（平成 19 年）に記載された種で、採集例は少なく、確認された場所も沖縄島の本部半島と瀬底島周辺に限定されている。また、発見場所は潮の満ち引きの影響のあるサンゴ礁域の海岸で石の多く転がっている場所に限定されており、分布特異性が高い。</p> <p>本種のメスは、海岸の波打ち際に点在する石やサンゴ瓦礫の小穴に営巣し、産卵する習性をもつことが確認されている。このことから、海岸開発などによる沿岸環境の悪化が繁殖に直接影響を及ぼすと考えられ、海岸開発が進むことで個体数が急激に減少する恐れがある。</p> <p>過去の環境省による調査では、沖縄県は島嶼域の中で人工海岸の増加が最も大きくなっており、現在も沖縄県内各地で埋め立て工事や沿岸開発が実施されていることを鑑みると、生息条件は悪化状況にあると考えられる。</p> <p>本種は潮の干満の影響のあるサンゴ礁域の海岸に強く依存する生活様式から、その生息条件は悪化状況にあり、今後絶滅危惧に移行し得ると判断されることから、準絶滅危惧(NT)に選定した。</p>				

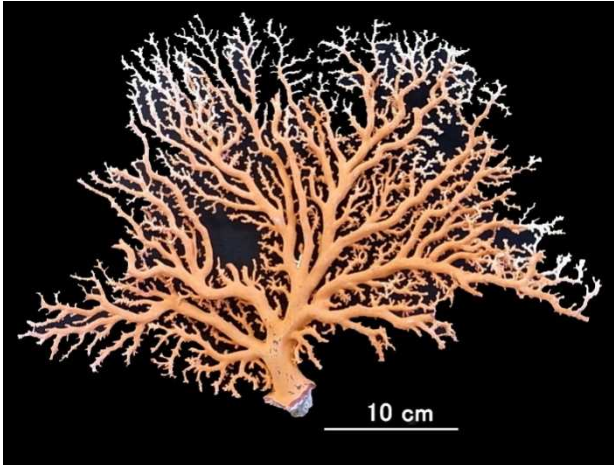
その他無脊椎動物

和名	オオシャミセンガイ	絶滅危惧 A 類 (CR)		
学名	<i>Lingula adamsi</i>			
分類群	腕足動物門	科名	シャミセンガイ科	
この種について				
<p>世界最大級のシャミセンガイ類で、干潟やその周辺の浅い海の砂泥底に生息する。</p> <p>国内では有明海に生息するほか、過去に山口県で記録がある。朝鮮半島にも生息するが、若干の遺伝的な違いがある。</p>				写真提供：逸見泰久(熊本大学)
評価の理由				
<p>本種の生息地である有明海沿岸からの近年の採集例は極めてまれで、平成元年以降は柳川市沖端沖、大牟田市三池沖、荒尾市荒尾干潟などで散発的に確認されているだけである。最近 10 年間で確認事例がほとんどなく、国内における本種の生息地の状況は危機的であると考えられることから、今回もっとも絶滅の危険性の高い絶滅危惧 IA 類(CR)に選定した。</p>				

和名	アリアケカワゴカイ	絶滅危惧 B 類 (EN)		
学名	<i>Hediste japonica</i>			
分類群	環形動物門	科名	ゴカイ科	
この種について				
<p>本種には長年、「ゴカイ」の和名が用いられていた。明治 41 (1908) 年に新種記載されて以来、ほぼ 100 年にわたり日本全国の汽水域に分布する普通種とされてきたが、近年の研究の結果、「ゴカイ」にはよく似た 3 種が含まれていることが明らかとなり、その 3 種に対して「ヒメヤマトカワゴカイ」、「ヤマトカワゴカイ」、「アリアケカワゴカイ」という新たな和名が提唱された。</p> <p>本種を除く 2 種は、日本の広い地域で普通に見られるが、本種は現在有明海の湾奥部の泥干潟にのみ分布する。国外では韓国西岸(黄海)に分布する。</p>				
評価の理由				<p>上:生体(全体写真) 下:頭部の拡大 写真提供:上:佐藤正典(鹿児島大学) 下:菅孔太郎(鹿児島大学)</p>
<p>本種は、かつて有明海のほか瀬戸内海、伊勢湾および三河湾にも生息していたことが過去の標本からわかっており、本州を含む広い範囲に分布していたと思われる。しかし、生息地である軟泥干潟が干拓や埋め立てによって大規模に消滅し、また生息地周辺の開発により底質等の環境が変化したことによって、現在では、本種の分布が確認されているのは有明海の奥部(福岡県の大牟田市から佐賀県沿岸を経て長崎県の諫早湾にかけての範囲)には限られている。</p> <p>このように、現在の生息地の面積が限られており、国内唯一の生息海域である有明海で生息環境が悪化していることから、絶滅の危険性が高いと判断し、絶滅危惧 IB 類(EN)に選定した。</p>				

和名	ツバサゴカイ	絶滅危惧 B 類 (EN)		
学名	<i>Chaetopterus cautus</i>			
分類群	環形動物門	科名	ツバサゴカイ科	
この種について				
<p>干潟やその周辺の浅い海の砂泥から礫砂の海底に U 字型の棲管を作って生息する。</p> <p>かつては北海道～九州の干潟で普通に生息していたが、現在健全な個体群が残っている場所は限られる。</p>				<p>上: 棲管(両端が確認できる) 下: 生体(全体写真)</p> <p>写真提供: 三浦知之(宮崎大学)</p>
評価の理由				
<p>本種は全国の干潟の普通種とされてきたが、現在では多くの地域で見られなくなっている。過去 10 年で、九州地方の複数の生息地でほとんど生体が見つからない状況になりつつある。関東ではすでに 30 年ほど前から減少が指摘されていた。本種の減少の背景には、干潟環境の改変が影響していると考えられる。既知の生息地では著しい減少傾向にあり、絶滅の危険性が高いと考えられることから、絶滅危惧 IB 類(EN)に選定した。</p>				

和名	ヒガシナメクジウオ	絶滅危惧 類 (VU)		
学名	<i>Branchiostoma japonicum</i>			
分類群	脊索動物門	科名	ナメクジウオ科	
この種について				
<p>頭索動物亜門に属する。水深数十メートルまでの粗砂底に生息する。</p> <p>三陸海岸～九州(太平洋側)、丹波半島以南(日本海側)で記録がある。</p> <p>繁殖期にはオス(写真上)では青白い、メス(写真下)では黄色い生殖巣を発達させる。</p>				<p>写真提供: 逸見泰久(熊本大学)</p>
評価の理由				
<p>本種は無脊椎動物の中ではよく調査がされている種であるが、愛知県蒲郡市大島(国の天然記念物)の干潟では昭和 43(1968)年を最後に記録がないなど、特に干潟で減少、その周辺の浅い海でも多くの場所で個体数が減少している。主要分布域における複数の調査でも、密度、分布地点の減少が推定された。これらのことから、種全体としての個体数が明確に把握できていないが、個体数の減少により絶滅の危険が増大していると考えられることから、絶滅危惧 II 類(VU)に選定した。</p>				

和名	アカサング	準絶滅危惧 (NT)	
学名	<i>Corallium japonicum</i>		
分類群	刺胞動物門	科名	サング科
この種について			
<p>いわゆる宝石サングの仲間であり、高級宝飾品などとして需要がある。本種は明治以降に本格的に漁獲されるようになった。</p> <p>本種は国内では相模湾、三重、和歌山、高知、八丈島、小笠原、五島、鹿児島～沖縄の水深75～300mに分布し、成長した群体は高さ30cmを超える。</p> <p>水産庁「日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（1996年）」では、減少種（明らかに減少しているもの）に位置づけられている。</p>			
			
写真提供: 岩崎望(立正大学)			
評価の理由			
<p>近年、小笠原及び沖縄近海において外国漁船により短期間に密漁が行われた。また、五島近海でも外国漁船による密漁事件が起こっている。国内では持続的な漁業のために珊瑚漁の規制を強化する取り組みが一部行われているが、近年操業許可を持つ漁船数が増加している。</p> <p>現時点では絶滅危惧と評価するほどには絶滅の危険度は大きくないが、漁業資源としては減少しており、また漁獲圧が高まっていることから、準絶滅危惧(NT)に選定した。</p>			